



校長室だより

三刀屋高等学校・掛合分校

第6号

令和3年5月7日



○対話とは・・・

三刀屋高校遠景⇒

『島根県の合戦』（いき出版 2018）で幕末期の「隠岐騒動」を担当したのをきっかけに、「対話」について考え学校広報誌に寄稿したことがある。ちなみに、雲南に関係するところでは、戦国期の「三刀屋石丸城籠城戦」や「地王峠の戦い」などが収録されている。

隠岐騒動は、松江藩の預かり地となっていた幕領である隠岐国が、明治維新を期に、島民たちの決起によって松江藩の郡代を島から退去させ、自治政府を樹立した出来事である。隠岐騒動が、『レ・ミゼラブル』で描かれた時代の出来事である、世界的に有名な革命的都市自治体政府であるパリ・コミューンよりも早いことはあまり知られていない。隠岐騒動では、島民が追放する郡代を乗せた船に餞別（せんべつ）として米や酒を積んだと伝わっている。革命的な行動であるのに郡代の命を奪わずに追放したことと合わせ、隠岐古典相撲に流れる精神を垣間見ることができる。

コミュニケーションには、「対話による合意形成」という意味もある。世界に先駆けた自治政府が隠岐で樹立できた要因は、誰かに扇動（せんどう）されたり、暴発したりしたのではなく、隠岐国を良くしたいという強い思いのもと、納得いくまで島民同士の対話がおこなわれ、その上で成された合意のもとで統一した行動をとったこと。さらに、相手（郡代）ともねばり強い交渉（対話）をおこなったことにあると考えている。

「グローバル企業のような多様な人材がいる組織では意思決定が逆に早い。それは、バックボーンが異なる人が集う場では、数字・ファクト・ロジックで議論するしかないので忖度などない合理的で素早い意識決定がなされるからである。」とライフネット生命創業者の出口治明氏は、あるインタビューで話しておられた。これからのグローバル社会においては、合意形成を導くためになされる対話の中で、エビデンスが重要視されていくことは確かだと思うが、対話が人と人との会話である限り、そこには感情や思いというものがあるし、それを忘れてはAIと同じになってしまうことを忘れてはならない。

笑顔は、人間にとって最初に獲得するコミュニケーションである。それぞれの心の中にある「私、よくがんばった。」「私ってすてきじゃない。」という“今の自分に対する素直な満足感や肯定感”が笑顔の源ともなっている。そのためには、エビデンスに基づく会話をしながらも、自分自身が尊重される感覚が大事であるし、だからこそ相手のことを尊重し認め合うことが大事である。

しかし、対話の中で前向きでない言葉が出ることは当然ある。相談においては、「悩みを話すことは、悩みを離すこと、手放すこと」とも考えるそうだが。対話においては、結論を急ぎ過ぎず、またすべてを論理的に合理的に解決していかうとするのではなく、宿題として残すくらいの余地が大事であると考えている。それが語り合うことであり、これからのグローバル社会において捨ててはいけない部分ではないだろうか。余地のない合意形成は、ファシズム的にもなりかねない。つまり、対話においては、相手の意見を受け止め、互いを尊重し合うことに加え、心と会話に余裕を持つことが重要と考えている。

「主体的・対話的で深い学び」が、令和4年度の高校1年生からはじまる学習指導要領の中でうたわれている。全国の各高等学校においては、すでにこうした授業が浸透しつつある。そんな今だからこそ、対話の意味を自分なりにしっかりと考えるべき時だと考える。

※今回の校長室だよりは、松江東高校教頭時代に寄稿した原稿を加筆・修正したものです。

★「校長室だより」は、学校ホームページに不定期掲載しています。ぜひ学校ホームページをご覧ください。

